

トータルコミュニケーション研究会の歴史 設立前後の状況

矢沢国光インタビュー 第2回

実施日 2023年10月9日（月）13時

話し手 矢沢国光

聞き手 上農正剛

ZOOM 動画記録の文字起こし

### はじめに

上農／今日は先日いただいたレジュメの第二部ということになります。前回は矢沢先生が聾学校の教師として最初に赴任された足立聾学校のお話を伺いました。教育の際に使用するコミュニケーション方法について幼稚部と小学部と中学部で話し合った結果、やり方が幼小中で三つに分かれていき、幼稚部においては指文字の導入により成果が出た。その結果、インテグレーションに繋がった状況があったが、そこで足立聾学校が閉校になったという所までの話でした。今日はそのこととの絡みも含め、そのような状況の中からTC研がどのようにして立ち上がって行ったのかというあたりから話を始めていただくといいかなと思います。

### トータルコミュニケーションとの出会い／矢沢の田上先生訪問

矢沢／それでは30年誌に年表があるので、それに沿って、遡っていきたいと思います。トータルコミュニケーションということについては、帝国ホテルで国際会議があったということが1975年の所に記載されています。その時に初めてそういう言葉を知ったわけで、それ以前は栃木聾学校では同時法ということばを使っていて、トータルコミュニケーションということばは使っていなかった。同時法については、私が栃木聾学校の田上先生に会いに行ったのが・・・いつと言ったかな。

上農／そのお話は伺いましたが、いつという正確な年月日についてはまだ伺っていません。野沢先生からの御紹介で会いに行かれたということでしたね。それは何年になるのでしょうか？

矢沢／私が足立聾学校に赴任したのが1970年で、それから割とすぐだったと思うので・・・。

上農／ということは1971、2年頃ということになりますか？

矢沢／もう少し後かなと思います。1975年に栃木聾学校で関東地区聾教育研究会が開催されていますから、その後だと思います。

それで、これは後で前田さんに訊いて欲しいんですけど、海外聴覚障害教育視察団ということで伊藤さん、岩淵さん、前田さんあたりがアメリカに行っているいろいろな見えてきたということがあります。

上農／年表を見ると、それが1976年ですね。

矢沢／それで、私の方は野沢さんの紹介で同時法というものがあるということを知ったわけですが。そのことは足立聾学校の閉校記念論集に書きました。

### 足立聾学校の手話導入と栃木式同時法手話の問題点

矢沢／足立聾学校ではまず中学部で手話を使おうということで、手話を導入しました。そして、少し遅れて幼稚部では指文字を導入するということになりました。そこで一つ問題になったのは、栃木の同時法の手話ってということでした。そのこともどこかに書いたのですが、

要するに栃木の同時法は日本語の音韻を指文字と手話で表すという考え方だから、それは意味を表すものではなくて音を表すものなのです。

これはアメリカでそのようなやり方があったのです。確か SEE と言ったかと思います。

Signing Exact English ですね。SEE1 とか SEE2 という言い方がありました。この考え方では一つの日本語に対しては一つの手話という原則になります。だから、例えば「使う」という日本語に対して、普通の手話では「お金を使う」という場合と「人を使う」という場合では手話を使い分けています。しかし同時法ではそれを意味に拠っては使い分けません。日本語では一つの音声に対して一つの手話という原則になります。

しかし、普通、手話では「電話をかける」と「布団をかける」ではそれぞれ別の手話で表現しますね。「迷惑をかける」も別の手話です。栃木の同時法では「かける」は全部一つの手話で表すということになっていました。具体的にはどう手を動かすのかは忘れましたが、当時、辞書にもそれが載っていました。だから、手話に対する日本語と手話の表す意味というものが必ずしもピンと来ないという場合があるということなのです。

足立聾学校で手話を導入した時には、そこまで厳密にやるとやはり通じにくいということで、SEE という考え方はとらないで、意味に合わせて手話を使い分けるという形でやりました。そこは栃木の同時法とは違うやり方でした。

上農／足立聾学校が栃木式の同時法とは違うやり方で手話を導入したという点について、田上先生はどう思われていたのでしょうか。その違いについて何か田上先生との間でディスカッションのようなものはありましたか？

矢沢／いや特に話したことはなかったですね。栃木の聴覚障害者協会は吉沢昌三さんが栃木の教員になって、同時に栃木の聴覚障害者協会の中心的メンバーでもあったので、栃木の聾啞協会の中では栃木式の同時法的な手話を割と使っていたみたいだけれど、それ以外の聴覚障害者が口話と手話を併用する場合には同時法的な SEE 的な手話の使い方をする聾啞者というのはいないわけです。野沢さんにしても誰にしても。やはり、意味に合わせて手話を使い分けるということをやっています。

実は栃木聾学校もずっと後の話になって、つい最近、やはり SEE 式はちょっとまずいということになって変わってきているようです。そのことは最近の TC 研の会報に報告が載っています。

### 田上先生の手話観

上農／繰り返しになりますが、そのような栃木式の同時法が持っていた問題について田上先生はどうお考えだったのでしょうか？御自身としては SEE 的な手話でいいんだという確信に基づいて教育に当たられていたということでしょうか？

矢沢／田上先生はずっと栃木式の同時法でやっていました。教育の場面だけではなくて、聴覚障害者の手話も SEE 的なものにすべきだと考えていたのだと思います。やはり日本語を中心に考えていれば、日本語のやり取りで今までの口話だけでは限界があるので視覚的手段が必要なのだと考えていたのだと思います。だから口形も併用するし、手指も併用する。聴覚については人によって差があるから、使える時には使う。主として視覚的な手段として口形と手指、そしてあくまで日本語の音韻を表す記号として視覚的な手段を使う。聴覚障害者のコミュニケーションは日本語のコミュニケーションにするべきだという考えだったと思います。

従来の聾者の手話については伝統的手話という言い方があって、日本語とは別の手話としてコミュニケーション手段が必要だと考えていたのだと思います。田上先生ご自身の手話の

位置づけの正確なところはわかりませんが、「社会的な手段として必要だ」という言い方をしていました。

### 全日本聾啞<sup>(注)</sup> 連盟の反発

(注：当連盟は、2013年4月から「聾啞連盟」を「ろうあ連盟」の表記・名称に変更していますが、ここでは歴史的意味を込めて、インタビューに出てくる当時の表記・名称をそのまま使用します)

矢沢／そこら辺がインタビューの3回目の聾教育連絡協議会の所で話そうと思っていますが、全日本聾啞連盟との対立の原因にもなっていたと思います。同時法についてトータルコミュニケーション研究会がそのやり方を普及するという点について聾啞連盟はずっと支持しませんでした。反発していました。反発した理由はよくわからないのですが。

上農／それは同時法が日本語の習得を目指しているということが、聾啞連盟としてはちょっと違うのではないかということからくる反発だったのでしょうか？

矢沢／日本語の習得というより、同時法の手話は聾啞者が使っている手話と違うという、聾啞連盟側にはそういうことがあったのだと思います。手話については聾啞連盟が全部、自分たちが取り仕切っているということで、聾啞連盟以外の所で手話についてあれこれ言うのは認められないということだったのだと思います。手話の辞書についても聾啞連盟が作っているものがありましたが、それとは別に田上先生たちが日本語の手話辞典とか作っていましたから。この反発の問題は後々までずっとありました。そのことについてはまた後ほど話します。

上農／わかりました。

矢沢／TC研の活動によって全国の聾学校で手話を使う所が徐々に増えていきましたが、厳密な意味で栃木式のSEE的同時法でやっている所はなかったと思います。聴覚障害者が従来、口話法と併用で手話を使うときの手話でやっていたと思います。

### TC研は当初、教育志向ではなく、改革運動的なものだった

それからもう一つは、トータルコミュニケーション研究会というのは初めは教育が中心ではなくて、聴覚障害者のコミュニケーション問題、つまりそれまで聴覚障害者は聾学校で口話法を中心とした教育、つまり手話を使ってはいけないという方針で教育を受けてきたわけで、それに対して、それを打破したいということがありました。

ですから、トータルコミュニケーション研究会というのは記念誌の年表にあるように1978年に第1回が開かれて、それから第2回、第3回と開かれているんですが、その頃は大概何百人と集まって、教育関係者だけではなく、一般の聴覚障害者が集まっていた。トータルコミュニケーションというのは、聴覚障害者にとっては自分たちの手話を認めない、引いては自分たちの生き方を認めない従来の口話主義の聾教育に対する改革運動的なものでした。

### TC研の最初の発案者はだれだったのか

上農／1978年に第1回のトータルコミュニケーション研究大会が開催されているのですが、その前に、このような研究会を立ち上げようという話がどこで、どういう経緯で持ち上がったのか？それはどういう人たちによって発案されたのか？そこが大事なポイントで、それを知りたいのですが。最初の提案者は誰だったのでしょうか？

矢沢／うーん、それはよく覚えていません。それは前田さんに聞いてもらった方がいいかなと思います。

上農／わかりました。例えば、第1回の大会をやるという知らせは矢沢先生の所にはどのような形で来たのでしょうか？

矢沢／記念誌に役員名簿がありますが、100頁に第1回のプログラムが載っています。大阪教育大の村井純一先生に記念講演をお願いしたりしました。99頁に年表が載っていて、第1回、第2回の所は空白になっています。だから、これは正式には第4回の時に田上会長というふうになったと思います。この時、副会長が神田（和幸）、局長が矢沢になっているけれど、これがどうしてなのか・・・前田さんか私だったとは思いますが。

上農／ということは、最初の立ち上げの時から既に田上先生が中心になって主導されたということなのでしょうか。

矢沢／そうだと思います。そして、正式な大会としては第4回から、ここからだということだと思います。

### TC と 栃木式同時法 の 関係

上農／ちょっとすみません。話は戻りますが、1975年に国際会議でTCということばに矢沢先生も初めて出会われたということでしたが、この時にトータルコミュニケーションの提唱者のホルコム（Roy Holcomb）氏が来日していたわけですか？

矢沢／そうです。

上農／ということは、TCということばはホルコム氏によって日本に導入されたという理解でいいのでしょうか？

矢沢／そういうことです。それで、私たちはTCという考え方は栃木の同時法と同じではないかというように理解したわけです。

上農／栃木の同時法が先にあって、そこにアメリカからTCがやって来て、「あー、これは同じことだな」ということになったということですね。

### TC と 栃木式同時法 の 違い

矢沢／田上先生たちはアメリカに視察に行っているわけですから、そのような動きは知っていたと思いますが、ホルコム氏のTCと自分たちの同時法はたぶん少し違うと考えていたと思います。ホルコム氏の場合には聴覚障害者である当事者にとって適した方法はすべて使うという考え方なのです。だからアメリカ手話がいいなという場合はアメリカ手話を使うし、SEEがいいという人はSEEを使えばいい。指文字がよければ指文字を使う。だから、どういう方法でもいいんだ。その子どもに合った方法を使えばいいという、具体的な指導方法ではなくて「理念」なんです。

それで、この役員名簿を見ると、1988年までは神田さんが副会長になっています。実は田上さん、神田さん、矢沢、前田、それから栃木の森さんたちと一緒にNHKから『トータルコミュニケーション』という書名だったか、本を出しました。その本を書くための分担原稿を持ち寄って、田上先生をまとめ役として読み合わせる勉強会を2、3年、続けてやりましたが、そこで原稿を摺り合わせると同時に、各自の考え方の違いが段々明らかになってきたということがありました。

上農／神田先生が初期の頃より関与されていたということですが、この時期、神田先生はアメリカから帰って来られていた時だったのでしょうか？神田先生はアメリカで英語学の研鑽を積み、同時にアメリカの手話言語学の情報も日本に持ち帰られ、それが所謂日本手話学会の基盤になったと伺っていますが、神田先生がトータルコミュニケーション研究会に関与されていた経緯はどういうものだったのでしょうか？

矢沢／神田先生のアメリカ留学等のことは全然知りません。アメリカの手話のことについて詳しい先生がいるということぐらいしか知りませんでした。

上農／そうですか。神田先生のトータルコミュニケーション研究会への関与の経緯については神田先生ご本人に確認してみます。

矢沢／神田先生が団長になってアメリカに視察に行っていますし、その報告書もありますから、是非、それも読んでみてください。

上農／先ほど矢沢先生が言われた聾啞連盟の反目ということについては、いろいろな点で、ある意味で今もまだ続いているような気もするのですが、それはどうでしょうか。

矢沢／いや、それは途中から変わったんですね。それから先ほど言った田上先生たちと出したトータルコミュニケーションに関する本ですが、30年記念誌の95頁に1985年田上隆司編著『聴覚障害者のためのトータルコミュニケーション』日本放送協会という記載がありますね。

### 田上先生の同時法的手話の考え方に対する違和感

上農／この本の出版については、編集の段階で分担執筆した関係者の間で互いの考え方の違いが明確になったというお話でしたが、そのあたりのことをもう少し詳しく聞かせていただけますか？それは手話に対する考え方ということだったのでしょうか？

矢沢／アメリカに行ったのが次の年の86年ですよ。

上農／そうですね。欧米ツアーと書いてあります。

矢沢／アメリカに行って、現地のトータルコミュニケーションの状況を見てきて、田上先生の考え方とはちょっと違うなという思いを深めたんですが、以前のNHKの本を出す段階では、やはり田上先生の場合は、聾啞者の手話は伝統的手話として認めるけれどもそれは中心ではないんだと。やはりこの世界というのは聞こえる人と聞こえない人が作るものなんだと。で、そこでは共通の言語というのは日本語だと。だから、聴覚障害者は日本語で聞こえる人と自由にコミュニケーションできるようにならなければいけないという、そういう考え方が（田上先生は）強かったと思います。で、そのために同時法で手話もSEE的な、意味よりも日本語を読み取るための視覚的な手段という考えになっていったということがあったのだらうと思います。

それに対して、それはちょっと違うんじゃないかという思いがありました。聴覚障害者にとっての手話というものは、それ自体でもうちょっと大きな意味があるんじゃないかという、そこら辺のズレがあったような気がします。

### 栃木と足立聾の手話導入の状況の違い

上農／今、矢沢先生が言われた田上先生の手話に対する考え方ですが、それは田上先生は最後まで堅持されていたように見えましたか？あるいは矢沢先生たちとのディスカッションを通して、当時、所謂「伝統的手話」と言われた聾者の手話の価値をもっと大きなものとして認めるような考え方に変わられたのでしょうか？

矢沢／うーん、それは栃木の手話の導入の仕方が、足立聾学校なんかで手話を導入したやり方と違うんですね。足立聾学校の場合には上の方、つまり東京都の教育委員会とか校長とか、とにかく口話法というのが建前でやるわけでしょう。でも、現場の教員の方はそれじゃちょっとうまく行かないということで、上から言われる口話法ということはある意味で無視して他の方法でどんどんやっていくというやり方でした。あくまで現場の教員とか生徒とか成人の聴覚障害者、それとの関わりの中で教育法を変えていくという方法をとりました。

### 栃木聾の同時法が変わらず持続された理由

矢沢／栃木の場合にはどちらかと言うと、上の方から、行政的に決めていくという、それをずっとやっていくというやり方なんです。そういう意味では田上先生は栃木聾学校でも非常に強い力を持っていたし、県の教育委員会に対しても働きかけてそれを栃木聾学校の教育方針として認めさせていました。栃木は聾学校が一つしかないので、栃木聾学校で決まればそれが栃木県の方針になるので、それをカチッと決めてしまうという状況でした。

あとは田上先生が栃木聾学校から出て、養護学校に行っちゃうんですけど、いなくなっても一度決めたものはその後もずっと聾学校の教育方針として、それを誰かが変えようと言わない限り、そのままずっと続いていくという形になったのです。だから、それが栃木の場合には10年、20年、30年、そのまま行えたわけです。

### 栃木聾の日本語に対する教育の成果

矢沢／なぜそんなことが出来たかと言うと、傍から見ていての推測ですが、ひとつにはそれによって日本語の力がすごくなったということはあると思います。そのことは僕はこの中（矢沢著『ことばはコミュニケーションの中で生まれ育つ』2019年）のどこかに書きました。あー、99頁ですね。「栃木聾学校の指文字の早期使用」です。

だから、栃木聾学校の場合は小学校3年生の前半までは指文字を使い、手話は使わないというやり方でした。そこも大きな違いですね。足立聾学校では手話の使用についてはもっと早い幼児期の段階から使うというやり方に段々なって行きました。栃木の場合には日本語の音韻によるやり取りが大事だということで、手話は一切使わないということで徹底したわけです。逆に言うと、子どもの日本語の読み書きというか、会話は他の聾学校と比べても格段に成果があったと思います。

上農／矢沢先生としてはその栃木聾の教育の成果は成果としてお認めになるのでしょうか？

矢沢／それはそうです。しかし、その結果として栃木からインテグレーションしちゃう子どもが多かったみたいですね。で、（インテグレーションした子どもたちの）そのあとのことはちょっとよくわからないでしょう。インテグレーションして、そのあと、または社会に出て、どうなったのか？

上農／そのような栃木式の日本語の習得に重きを置いた同時法で教育を受け、日本語の読み書きの力はついて、インテグレーションもした子どもたちがいます、と。しかし、その子どもたちが成人してからどうなったのかという部分に関する報告とか記録とか話とかを今、目にしたり耳にしたりするということはありますか？

普通に考えると、日本語の読み書きの力はついたかもしれないが、聾者としてのアイデンティティ等の面ではうまく行かなかつたんじゃないかというような批判が現在の流れだと出てくるような気がします。そのあたり、何か矢沢先生の方でお考えがありますか？

矢沢／それはないんですが、さっき言ったように、栃木聾学校もSEE式な手話から意味に合わせて手話を使うという形に変わってきました。そのとき、同時に幼児に指文字だけで手話を使わないという、その考え方も少し変わってきました。幼児にも手話を使うという状況が今、実際どれくらいあるかわかりませんが、そこは変わってきているみたいです。

### 栃木聾の教育方針の変化

上農／栃木聾においてその変化が起きてきたのはいつくらいからなのでしょう？

矢沢／地域の会報にはどこかに書いてあると思いますが、そんなに古い話ではないと思います。

上農／栃木聾におけるその変化というか、反省と言うと違うかも知れませんが、それは例えば「ろう文化宣言」などが出て、日本手話ということに対する意識が高まったという時代的な流れに影響を受けたということでしょうか？

矢沢／栃木の中でも聴覚障害教員が初め吉沢さんでしょう。それから目が悪い人、名前を忘れましたが、数学の教員で、その人と、そのあとにまたもう一人、聴覚障害者の教員が栃木聾に入りました。そのような聴覚障害の教員の考え方も影響したのかも知れません。

それから、僕が思うには、先ほどインテグレーションした子どもが多いと言ったのですが、栃木の場合、確かに日本語の力は幼児教育でもってすごく上がっているということがありました。それは小学生になってもそうなんですよね。ただし、授業参観なんかで見ていると、やっぱり何というか、子どもの教育として見た場合にどうなのかということがありました。

子どもの教育とは言語教育だけではないんです。教科教育もあるし、幼児の場合は遊びのようなものもあるし、そこら辺のことが、まあこれは遊びについてはまた別に言いますけど、これははっきり言うことは出来ないんだけど、どうもそこら辺はあんまり力をいれてなかった気がします。

上農／矢沢先生が仰ろうとしていることはわかります。だからこそ、もし田上先生がご存命であれば、直接、田上先生にそのあたりについてはどうなんだろうかとお尋ねすることが出来たし、そう出来ればよかったんでしょうけれど。

その辺は本当に難しい問題だと思います。日本語の力をつけるという問題と、聞こえない子どもの聞こえない人としてのトータルな精神的な発達なり成長をどう保証するかという問題があります。その二つのバランスをどうとるかということがあり、それは今でも大事な問題だと私も思っています。

いずれにしても、栃木の同時法というものも時代と共に少しずつ変化してきているということがわかりました。

### 閉校になった足立聾学校の試みは大塚聾学校に受け継がれていった

矢沢／特に幼児教育については、足立聾学校は一時、前に話したように、幼稚部では指文字は使うけれど小学部ではキュードスピーチを使って指文字を使わないとなった結果、インテグレーションが増えたということがありました。

そのあと、また聾学校での教育が重要だということで、考え方が変わってくるのですが、結局、足立聾学校は東京都の聾学校の再編成で閉校になってしまいます。葛飾聾学校に統合されたわけですね。あれがいつだったかな。

それで、足立聾学校の幼稚部の指文字を使ったやり方がありましたが、既に手話も幼稚部で使ったのです。そういう足立聾の幼稚部の教育のやり方は統合された葛飾の方にはあまり行かずに、むしろ大塚聾学校でそれが試みられるようになりました。それは足立の校長の、名前は誰だったか・・・

上農／金町学園の方に最後は行かれた・・・濱崎久美子先生ですね。

矢沢／あの方が足立から江東の校長になったのかな、それから大塚に行ったのかな。子どもと話すときに口話だけで話すとうまく通じない。で、手話を使って話した方が子どもと通じるという自分の体験もあって、大塚聾学校の幼稚部に足立の幼稚部から長谷川純子さんという先生が入って、大塚の幼稚部を中心的にやりました。それで足立でやっていた指文字とか手話を使う幼児教育を濱崎さんも黙認していたわけですね。それで、むしろ大塚の方で足

立の試みは花開いたということがありました。

大塚に移っていった足立の試みは、幼児教育について…この資料（「ろう学校幼児教育のあり方」）は持っていますか？

上農／いえ、持っていません。

### 青木久子先生の指導を受ける－あそび中心の幼児教育の重視

矢沢／2013年12月の発行ですね。この中に載っているけれども、青木久子先生という人、聞いたことないですか？

上農／聞いたことはありません。

矢沢／青木幼児教育研究所、今でも元気かどうかわかりませんが、この人は東京都の教育庁の指導部において、国立教育研究所統括指導主事、国立音楽大学教授兼附属幼稚園園長、それを退職したあと自分で青木幼児教育研究所を設立された方です。

この人に教わるという形で何回も聾学校に来て貰って、それで遊びが中心だということを知りました。青木先生というのは非常に難しい哲学的なことからは始めるんですよ。幼児教育なのに何でそんな哲学からは始めるんですかと聞いたら、まずそこから始めないと皆言うことを聞かないと言うんです。確かに本も沢山出しています。

要するに、聾学校の幼稚部の教育というのは普通の幼児教育の専門家から見ると歪なものに見えるわけです。言語指導に偏っていたりとか、教師がいて子ども達をその周りに座らせたりして、それでやり取りをすとか、普通の幼児教育では考えられないようなことをやる。だから、幼児教育では子どもの遊びということが中心だから、これをもっとやらなければ駄目だということで、じゃあどういう遊びの指導が必要なのかということを見て貰いました。

例えば、買物ごっこするにしても、焼き芋ごっこをするにしても、準備を全部教員がやってしまう。それに子どもは参加するという、そういうのは駄目だということですね。一番いいところを教師が取っちゃって、子どもにさせない。それは駄目だというような批判を取り入れて、幼稚部の教育というものを普通の幼児教育にふさわしいものに変えるということが大塚聾学校の幼稚部ではやったということです。

上農／先生、もう一度、青木何という先生ですか？

矢沢／青木久子です。本が手元にあるので、僕はもう要らないので、あとでそちらに送りますよ。

上農／それはどうもすみません。大塚聾学校の幼稚部にこの青木久子先生をお呼びして幼児教育のやり方を見直すという、そのことの元々のきっかけはどういうことだったのでしょうか？

矢沢／誰かな、これは。長谷川純子さんだったと思います。新井（孝昭）さんも前から青木さんのことは知っているんですよ。聾学校の幼児教育ではない独特の言語教育というものを換えなくてはいけないということは東京の大塚だけではなくて、奈良とか、あっちこちの幼稚部でそういう動きは波及していったと思います。じゃどこまでそれが出来ているのか、それはわからないけれど、ま、附属なんかは依然として昔ながらの聾学校のスタイルというか、そういうのではないかと思います。

上農／足立の試みが大塚に移っていき、長谷川純子先生を中心として、また青木先生の指導も加わって、大塚で遊びを重視する新しい幼児教育の対応の形が出来ていったということでしたが、その流れの中で木島照夫先生も足立から大塚に移っていかれていますよね。

矢沢／木島さんはどうなのかな…あー、そうですね。

上農／田中温子先生もそうでしたよね。

矢沢／あー、そうですね。

上農／そうすると、先ほど先生が言われましたが、葛飾の方には足立の考え方はあまり移っていかなかったということですが、それはなぜだったのでしょうか？

矢沢／足立から葛飾に行った教員は多いんですが・・・

上農／そうなんですか。ということは葛飾に行った教員が少なかったからというわけではないんですね。

矢沢／それは長谷川純子さんのような幼児教育をやるという考えを持った教員が葛飾の方には行っていなかったからだと思います。

上農／そうしますと、私などが先生のお話を聞いていると、足立では様々な試みがなされていたわけですから、足立にいた先生方は足立イズムというか、そのような考え方を全員の先生方がお持ちだったのかと外部の人間はつい思ってしまうのですが、足立にいたからと言って、必ずしも全員の先生方がそのような考えを持っていたわけではないということでしょうか？

### 親子キャンプ

矢沢／指文字を使うとか手話を使うとか、そんなところは皆共通でやっていたと思います。あとはこの30年誌の年表にあるように、親子キャンプというのをTC研でいつ頃からやっていたのかなあ・・・

上農／99頁に親子キャンプの記録がずっと載っています。この親子キャンプという企画はどなたが、どういう経緯で発案されたのでしょうか？

矢沢／これは前田さんとか長谷川純子さんが中心になってやったと思います。それから伊藤政雄さんの友人で女の人で、子どもを育てる会というのを作った聴覚障害者の女の人を見て、子育てをしている人たちなんかも一緒に行きました。

その親子キャンプに聞こえる親も参加してみて、聴覚障害者の親の子育てというものを見ることで聞こえない子どもへの関わり方がわかったと思います。

### 那須善子さんの子育て記録

矢沢／それからもう一つ、トータルコミュニケーション研究会について重要なことがあります。これ（「手話と日本語」ろう・難聴教育研究大会報告書 日本型二言語教育を求めて⑦ 2007年）は持っています？

上農／はい、持っています。

矢沢／この中に那須さん親子の成長の記録が載っています。これを大会で報告して貰って、その丹念な記録があったので、それを私が分析して冊子に載せました。それも大きかったです。この記録には武居（渡）さんが関わっていたんです。今、金沢大学教授の。それでビデオの記録とか写真の記録が沢山残っていました。それから那須善子さんは几帳面な人で、この冊子にも詳細な記録が載せてあります。

上農／私もこの記録は非常に貴重で、かつ重要なものだと思っています。

矢沢／F 通園施設と書いてありますが、富士見ヶ丘のことで、あの時代の記録とかが書いてあります。それから附属（筑波大学附属聾学校）の幼稚部に入ってからのことばのチェック表ですね。これも非常に丹念に手話で理解したこととか、指文字で理解したことが丁寧に記録されています。

上農／これは非常に貴重な記録ですし、何と言うのか、これは聞こえる親が聞こえない子ど

もを育てる上でも重要な示唆が多く含まれているものだと思います。特に手話で育てる場合の問題として。

矢沢／今、そこにこの現物がありますか？

上農／はい、あります。

### 「ライオン、こわい」－幼児期の親子間でのイメージの共有

矢沢／その中の42頁に、東武デパートに関する写真があります。これを見るとことばの誕生ということがよくわかるんですね。一緒にデパートに買い物に行って、そのあとでどこに行ったという会話になって、子どもの映里ちゃんの方は東武デパートなんていうことばは知らないから「ライオン、怖い」という手話をやったわけですね。で、母親の方はこれを見て、東武デパートにこういうライオンの看板があったので、あー、これは東武デパートのことを言っているんだなとわかり、それで通じた。

つまり、共通の体験ですね。共通の体験によって共通のイメージが頭の中に残って、それに子どもの方からこういう「ライオン、怖い」という一つの表現を表した。それを親が理解した。親子だけで通じることばなんですけど、ことばというのはイメージに付けられたラベルだというふうに理解できるんじゃないかと思います。

しかも、そのラベルというのは初めは日本語とか手話とか言うんじゃないで、その当事者の二人だけに通じる非常に私的なものなんです。そこから、段々、日本語を知っている親が日本語のラベルを子どもに教えて行くという形でことばが育って行くということです。だから、コミュニケーションの中からことばが生まれるということだと思います。私たちが書いたこの冊子の原点はやはりここからきているんですね。

ことばがラベルだというのはこのまえ話したアメリカのベル研究所の先生ですね、その人の本に書いてあったことですが、その時はラベルというのがピンと来なかったのですが、映里さんの話を聞いて実際にはこういうことなんだなと思いました。

ことばがない時、親子だけで通じるいろんなラベルを使ってやり取りしているということがここに一杯書いてあるわけです。日本語も、初めは通じない日本語でも、それを理解して、正しい日本語でもって理解して行き、正しい日本語を少しずつ覚えていくという経過がここによく現れていると思います。

### 今だからこそ再確認されるべき那須さんの育児記録の意義

上農／この那須さんが書かれている記録は結構分量もあります。ただ、このろう・難聴研から出ている冊子自体が多くのお母さん方に知られていないように思います。ですので、何らかの形で是非もう一回復刊していただいて、多くのお母さん方が読めるようにしてほしいと思います。

そう思うのは次のようなことがあるからです。最近、所謂バイリンガル教育というか、小さい時から日本手話で育てるという考え方が一部で強く支持されるようになってきています。それは一つの考え方としていいんですが、今日もずっと矢沢先生のお話を聞いていろいろな意味で感慨深いというか、複雑な思いがあるのは、田上先生には日本語の読み書きというものが聴者と聾者の間でも必要なんだというお考えがあったというお話がありました。その田上先生のお考えはある意味では私の考え方とも非常に近い部分があると感じます。

その上で、じゃあ聞こえない子どもたちが日本語だけでいいのかという問題があることは私も理解しているつもりなので、問題をそう単純に考えているわけではありません。

しかし、本当の意味でのバイリンガルという教育を実施するときに、じゃあ実際どういうふうにそれをやるかということになると皆がなかなかわからないわけです。日本手話を最初に導入して、乳幼児の時から家でも日本手話を使うというのはいいんだけど、じゃあそれに日本語をどういうふうに重ねていけばいいのかということが今でもわからないという問題があるのだと思います。

そういう意味で言うと、この那須さんの子育ての実践記録はこの問題に対する非常に意義深い、そして具体的な示唆を多く含んでいるように思うのです。

これを読むとわかりますが、那須さんたちはデフファミリーですから、今、矢沢先生が言われたようなラベルなり母子間の経験の共有というものがあるんだけど、日本語の習得のことも那須さんは相当きちんとやっていますね。そのことは記録を読むとよくわかります。ですから、現に映里さんは成人して、あれだけいろんな所で活躍していますが、彼女は恐らく日本語の読み書きもちゃんと出来るのだと思います。

だから、その点を皆がもう一度しっかり参考にするなり学ぶなりすべきことだろうと思います。そのための情報がこの育児記録には満載されているのですが、その割には多くの方がこの記録のことを知らないわけです。ですから繰り返しになりますが、名著復刊ではありませんが、この部分だけでも別刷りの冊子にしてでも読めるようにしてほしいと思います。矢沢/TC 研の大会に参加して直に話を聞いた人は知っているんですけどね。

上農/確かに講演を現場で聴いた人たちは感動されたと思いますが、その時から時間も経っているということもあるので、今のお母さん方、特にバイリンガル教育を望んでおられるお母さん方にこそ、この記録は是非読んでほしいと思います。

### TC 研、ろう難聴研の公刊資料の復刊事業をして欲しい

このこととも関連して、現在のろう・難聴研の事業として、今まで刊行された資料のうち重要な論文だけでも取り出して、別途、復刊シリーズの冊子にして出したらいいのではという実感を持っています。貴重な資料が死蔵されているのは本当に勿体ないと思いますので。

前回、矢沢先生からお聞きした富川哲治さんのことなども今は誰も知らないと思います。現状の聾教育の在り方の問題を考え直す上でも非常に大切な意味を持った方なのにです。過去に出版されたものがすべてそうだとは言えないかもしれませんが、今だからこそ読み返す価値がある、そして実際に役に立つ貴重な記録や論考が TC 研の資料の中には埋もれています。ろう・難聴研の役員の方たちにはそれらの資料を発掘し、復刊することを是非真剣に検討していただきたいと切望します。那須さんの育児記録はそれを最も感じさせるものでした。

（休憩）

### デンマークのバイリンガル教育との出会い

矢沢/前に作ったインタビューの計画案では第四部を「ろう・難聴教育研究会」としたんですけど、「トータルコミュニケーション研究会」の活動の後半期として「ろう・難聴教育研究会」に名称変更した、そこまで話していこうと思います。

上農/はい、それで結構です。私もそこまでは聞きたかったので。

矢沢/会の名称が変わったわけですが、なぜ変わったかと言うことはですね、これ（「デンマークのバイリンガルろう教育 ～あるプロジェクトの記録～ 1982年～1992年」ろう教育の明日を考える連絡協議会 2000年刊）は持っていますか？

上農／それは持っていません。

矢沢／ウェンディー・ルイスさんというデンマークの聾学校の先生が書いたデンマークのバイリンガル教育について報告した本です。元のパンフが出来たのは1982年から92年の記録となっています。要するにデンマークを中心としてスウェーデンもそうかな、バイリンガル教育ということがこの頃、北欧で起こってきて、トータルコミュニケーションのように音声語と手話と一緒に使うのは駄目だという考えですよ、バイリンガルは。やっぱり聾者の手話は音声語とは違うんだから手話は手話でやらなければいけない。トータルコミュニケーションのように両方一緒に喋りながら手話をするというのは本当の手話ではないんだと言って、北欧のバイリンガル教育の中では要するに口話と併用する手話というのは否定されたわけです。

### 会の名称変更－「トータルコミュニケーション研究会」から「ろう・難聴教育研究会」へ

矢沢／その考え方がずーっと入ってきて、それでTC研の中でも長谷川洋さんなんかは「トータルコミュニケーション研究会」のトータルコミュニケーションということばはやはりイメージが悪いから会の名前を変えた方がいいということを行いました。

もう一つの理由は、「トータルコミュニケーション研究会」の場合、当初の活動目的は聴覚障害者全体の課題の解決ということだったんだけど、実際には教育に絞られているから教育に特化した方がいいということで、教育ということばを入れて「ろう・難聴教育研究会」というように名前を変えました。

上農／最初に同時法というものがあって、同時にトータルコミュニケーションという考え方もあって、今の言い方で言えば対応手話容認という形でずっと来ているわけですよ。ところがバイリンガルになった場合には、手話は完全に手話言語という観点で、日本で言うなら日本手話ということになったと思います。これはかなり根本的な変化だったと思いますが、その時、対応手話容認という立場から、対応手話はよくないと、手話は音声を伴わない日本手話であるべきだとなった時、このことについて、矢沢先生ご自身はどんなふうにお考えになったのでしょうか？その変化に対する受け入れということについてですが。

矢沢／僕はね、野沢さんを初めとして成人の聴覚障害者と交流が多いんだけど、そのほとんどの人たちは中途失聴の人なんです。だから日本語がすごく上手い。で、彼らは日本語を喋りながら手話を使うという、そういう人たちなんです。だから、それについて僕は全然違和感はなかったわけです。

それからもう一つは、日本語の場合には何て言うかな、文字もね、音声に割と対応していますよね。英語の場合は綴りと音声が全然ちがうのが普通だから、英語にはもちろん指文字というのはあるけれど、それはまた音声と対応ではないとなるわけで。北欧のデンマークやスウェーデンの場合にもそういう面があるわけです。そこが日本とはちょっと違うんじゃないかという気がしました。

だから僕はトータルコミュニケーションという名前のままでいいんじゃないかと思っていました。もともとトータルコミュニケーションというのは理念であって方法ではないということがありますから。その人に合った手段でいいんだというのでいいんじゃないかと。

実際にTC研をろう・難研という名前に変えたときに、「TC研のままの方がよかったんじゃないか」ということをあっちこちから言われたことがあるんです。僕はそんなに変える必要はないと思ったんだけど、やっぱりTC研の中で長谷川洋さんを初めとして、何しろTCというのはイメージが悪いという意見があったし、ヨーロッパではバイリンガル教育から見るとトータルコミュニケーションというのは聾者の手話を否定する、そういう間違っ

た考え方だということになるので、それは止めた方がいいという、まあそんなことでした。

### 南村洋子先生の入会

会の名前を変えたことについては長谷川洋さんだけではなくて、南村（洋子）さんの影響もあるかもしれないですね。南村さんはイギリスにいるお子さんが聞こえなくて、その聞こえない娘さんを「母と子の教室」で口話でずーっと育てたのです。それがある時に娘さんの方から反乱を起こされたんですね。それで自分の考え方、日本語だけでこう持っていこうとしたことを間違っていたということに気が付いて転換したということがあります。聴覚障害者というのは「目の人」なんだと。手話をやっぱり第一に考えなくてはいけない。今まで口話教育でやってきた南村さんが親子の個人的体験ということもあるでしょうが、それでこのように変化したということがありました。

南村さんはちょうどこの北欧のバイリンガル教育が日本に入ってきた頃にこちら（TC研）に入ってきたのです。それまではTC研には入っていなかったのです。

これ（「北欧のろう教育から学ぶ～バイリンガル幼児教育から成人教育まで～」トータルコミュニケーション研究会 2001 年刊）は持っていますね？

上農／はい。

矢沢／この視察団ですね。TC研北欧視察団、これに南村さんは参加したんですよ。この時からですね、一緒にやるようになったのは。

### TC という考え方が時代状況に合わなくなってきた

上農／例えば、TC という名前のままではイメージが悪いという空気感のようなものが日本でも当時あったのでしょうか？

矢沢／それはありましたね。北欧のバイリンガルがバーッと日本に入ってきて、北欧の人たちに言わせればトータルコミュニケーションというのは古い考え方だから駄目だというわけでした。その影響はあったと思います。

上農／ということは、矢沢先生の中では会の名前はすぐ替えたとしても、まだTC という幅のある寛容な考え方もいいんじゃないかというお気持ちがあったのだらうと思いますが、トータルコミュニケーション研究会全体としてはやはりTCではなくバイリンガルなんだという考え方に変わって行ったのでしょうか？会の名前を変えたことで組織としてやはり大分変わっていったと思いますか？

矢沢／そうですね。手話の導入、手話を使うのはいつ頃からやるかということはずーっと問題になっていて、栃木の場合には幼稚部では使わない。小学校の前半は指文字だけ。小3の後半から手話を導入する、そういうふうに厳密に規定したわけです。

足立聾学校の場合は大きい方から、中学生や高校生はもうこれは手話を使う。で、下の方、幼稚部はまだ手話は使わないで指文字だけ。で、それが今度は段々逆になって来たわけです。下の方からむしろ身振りを使う。身振りと手話はそんなら区別はないわけだから、むしろ幼稚部の方で手話を使ったらいいのではないかということになっていきました。

この頃は確かにやはり聞こえる親の子育てということが頭を中心にあったと思います。聞こえない親が子どもを手話で育てるといえるのは、それはいいことじゃないかという、そういう考えは出てきましたね。

### 北欧のバイリンガルと「ろう文化宣言」－影響関係はなかった

矢沢／もう一つ言うと、トータルコミュニケーション研究会の当初の頃は木村晴美さんに

しても、後でそれこそ「ろう文化宣言」を出すような人たち、市田（泰弘）君などもそうですけど、そういう人たちも皆、トータルコミュニケーション研究会の方に来ていたのです。その頃は聾者の手話が聴覚障害者本来のことばだという考えは木村さんたちにとってもそんなにハッキリしたことでなかったと思います。

上農さんが「ろう文化宣言」で木村さんと長谷川さんの対談の司会をしたというのはいつ頃の話ですか？

上農／それは1996年です。ですから、その時は既にもう木村さんは市田さんと一緒になって日本手話という考え方になっていた時です。

矢沢／それはこのような北欧のバイリンガルの情報がもうそろそろ入っていた頃なのかな？

上農／木村さんと市田さんの「ろう文化宣言」の考え方は北欧のバイリンガルの影響ではないと思います。アメリカの影響から来たものだと思います。

ダスキンという掃除のサービスの会社がありますが、あの会社が留学支援制度を作っていて、それを利用してアメリカのギャローデット大学に留学した聾者たちがいます。留学と一言で言っても、短期のものや語学研修レベルのもの、きちんと学部で勉強するケースと様々ですが、いずれにしてもギャローデット大学でデフスタディーズと呼ばれる「聾者学」というものを学び、それを通して聾者としてのアイデンティティを明確に自覚した聾者たちが、その知識や情報や人脈を持ち帰ってきたことが原動力の一つになり、そこから「ろう文化宣言」的な動きが始まったのだと思います。所謂、日本手話という考え方ですよね。

矢沢／先ほどのトータルコミュニケーション研究会の冊子は2001年ですから、こちらの方が「ろう文化宣言」よりあとですね。

上農／ですから、「ろう文化宣言」が理念的な方向性を示し、それが明晴学園の開設にも繋がる日本における日本手話重視の動きはろう・難聴研が紹介した北欧のバイリンガルの影響を受けたものではないと思います。所謂、北欧経由のバイリンガルとカミズあたりの理論で強化された形のアメリカ経由のバイリンガルという二通りの別々の流れがあったのではないのでしょうか。

矢沢／明晴学園が出来た頃、彼らはこの北欧のバイリンガルに関するトータルコミュニケーション研究会の本のことは知らなかったみたいですね。ろう・難聴研の方はこの北欧の視察が一つの大きな転機になったと思います。

特にこのウェンディー・ルイスという非常に優秀な女の先生なのですが、この人が十年間くらい持ち上がりで子どもを見るのかな。で、その子どもたちがデンマークの一般学校の共通試験なんかでも優秀な成績を出したということも書いてあって、そういうことからバイリンガル教育というものの成果が十分なりつつものだという、ある意味でエビデンスをつけて報告しています。

上農／そのような実証的なエビデンスがあるということも含めて、矢沢先生もやっぱり北欧のバイリンガルという、つまり手話は対応手話的なものよりかは日本で言うなら日本手話、所謂言語としての手話の方が重要だと徐々に考えるようになっていたのでしょうか？

### 北欧のバイリンガルがろう・難聴研にもたらしたもの－手話“併用”の有用性

矢沢／いや、そうは思わなかったですね。那須（善子）さんは娘さんの子育てに手話と指文字、そして口話も、小さい時から同時に使っているわけでしょう。そこで並行して日本語を教えるという形で両方とも教えるということが出来ている。その話も聞いていたので、別に手話だけに限る必要はないと考えていました。

むしろ北欧のバイリンガルは幼児に手話を使うことの正当性を証明するものだったと思います。ろう・難聴研は実証されたその北欧の実践教育の意義を評価したということです。

それまでは栃木式の「幼児は指文字は使っていいけれども、手話は使わない方がいい」という考えだったわけです。奈良聾学校もあそこはキュード法でしたね。千葉聾学校もキュード法、それから滋賀もそうですね。ですから、口話法だけでは駄目だと言っている聾学校が使ったのはキュード法だったわけです。キュード法は日本語の視覚的な表現でした。やはり日本語に拘っているということですね。

それに対して、「小さい時から手話を使っていいじゃないか」という北欧型バイリンガルの考え方は幼児に対しても、別にキュード法だけじゃなくて、指文字だけじゃなくて、手話も使って、それも言語獲得に十分役に立つし、それによって日本語の獲得が阻害されることはないんだということを示したという意味があったと思います。

それを一番実践的にやったのが南村さんの大塚聾の幼稚部における実践だったと思うんですね。

上農／今のお話で矢沢先生が北欧のバイリンガル教育から受け取られたものが何だったかと言うことがよくわかりました。

矢沢／じゃあ、今回はこのくらいで。

上農／今回も長い間、ありがとうございました。

(第2回インタビュー終了)